

今津六角堂

2021年兵庫県景観形成重要建造物



今津六角堂について

文・写真 藤井成計

概要

- ・所在地 : 西宮市今津二葉町 4-10
- ・構造 : 木造、階数 2、寄棟造棧瓦葺
- ・竣工年 : 明治 15 (1882) 年・・・検証中
- ・明治 15 の施工 : 松本源七

大阪と神戸を結ぶ幹線道路である国道 4 3 号線の 1 筋南に、街路樹の豊かな酒蔵通りが東西に通っている。歴史ある西宮市立今津小学校はその通り沿いに有り、今津六角堂が小学校地内の南正門横の一郭に、通りに対して南面する形で建っている。今津六角堂の佇まいは明治の文明開化の雰囲気をも今に伝え、酒蔵通りに歴史を偲ばせる景観を提供している。

江戸の頃から学問の村であった今津では、飯田桂山が宝暦 5 (1755) 年、海辺に大観楼という学舎を建て、学者を招き教育を行っていた。明治 5 (1872) 年、学校制度を定めた学制が公布され、全国で小学校が開設されていった。教育熱心な土地柄であった今津は、翌明治 6 (1873) 年には今

津村、津門村が連合し常源寺を仮校舎として今津小学校を創立した。その後、明治 15 (1882) 年、教室の狭小により仮校舎を廃して、洋風建築の小学校校舎 (今津六角堂) を建設する。

正門に南面して六角堂校舎が建ち、両翼に別棟の平屋建ての洋風校舎が配された。建設費 8000 円の内 5200 円は村民有志 326 名の寄付金により賄われ、地域をあげての大事業であった。校舎を洋風建築で建てたのは、明治 10 (1877) 年に布達された「兵庫県公立学校建築法」にて洋風校舎が推奨されていたこと、近くの西宮小学校が既に洋風校舎で竣工し刺激を受けたこと、文明開化の流れのなかで地域の教育にかけた熱意が大きかったことが背景にあった。にわかに出現したモダンな洋風校舎には近在から見学者が訪れるほどになり、地域の人々の誇りであった。同年、東隣に戸長役場が建ち地域の中心的な建物となる。



六角堂はその後、校地内を 3 度移築改修され、そのたびに用途変更による新たな役割を担いつつ再生され続けてきた。昭和 30 (1955) 年、校地南西隅に玄関を東向きに移築し公民館として開館する。この時、外観は保存されたが内部は用途に合うよう改修された。昭和 40 (1965) 年、新公民館の建設に伴い取り壊しの危機があったが、地域住民の熱心な保存運動により、校地北側に玄関を南面させて移築し幼稚園舎として再生されることになる。

外観の原型を往時のままにとどめ、内部は改修して遊戯室及び管理室とした。この折、時の兵庫県知事より著名な文化財として「六角堂」との命名を受ける。平成 7 (1995) 年の阪神淡路大震災では幸いにも大きな損傷は受けず、平成 10 (1998) 年校地南側正門横の現在の地に小学校学舎として移築改修され、歴史資料室・地域交流の場として活用されている。同年「兵庫県さわやか街づくり賞 (建築部門)」を受賞している。

今津六角堂は木造洋風建築 2 階建、寄棟造棧瓦葺。左右対称形の建物で南正面中央に六角形の張り出しをもつ。寄棟屋根の軒出は短く、曲面付き繰形の軒蛇腹を四周に廻す。外壁は下見板張ペンキ塗の仕上げで、1、2 階の間に胴蛇腹を廻し、四隅にコーナーストーンを象った隅柱を飾る。正面外観は張り出しの左右に繰形付き幅広の窓枠をもつ縦長の両開き窓を 1、2 階とも同じ位置、同じ形状で開けている。当初を表す古い図にはアーチ窓に両開きの鎧雨戸が描かれているが定かではない。側面も同じように縦長窓が開けられているが中央は幅広窓である。当初は渡り廊下で別棟教室に繋がっていたので両開き扉が設けられていたためであろう。外壁足元は花崗岩切石 2 段積による基礎が丁寧に廻されている。



この建物の特徴は建物名の由来にもなっている、正面中央に突き出した六角形 (正確には八角形の半裁の平面形) の張り出しである。1 階は吹き放

ちの玄関ポーチで 2 階は全面に腰壁付引違ガラス窓のある明るいサンルーム空間となっている。

屋根は寄棟の主屋から張り出す形で宝形棧瓦葺の仕上げ、棟の頂部には木製の尖頭を飾りシンボル性を高めている。尖頭に付けられている方位飾りは保護を兼ねた改修時の付加物である。ポーチは丸面の花崗岩段石により、張出しと同じ形で地面より 3 段高く持ち上げて造られている。

奥正面には繰形付きの木枠に両袖、欄間付きのガラス入り両開き扉の玄関が迎えてくれる。張り出しを支えるのは、ポーチ床に礎盤石を据え柱頭に繰形の飾りをもつ 6 本の丸柱である。丸柱は 2 階まで延び、軒先と中間部に主屋と同じ蛇腹を廻し一体感を表出している。

2 階は柱間のすべてに井桁に組んだ格子の中に X 形格子が入る腰壁にガラス引違窓を備える和洋折衷の表現となっている。明治 4 (1871) 年に着工した神戸の三井組の絵図面に同じような手摺意匠が見られることから、建設にあたっては神戸・大阪の先進地域の洋風建築を参考にしたものと思われる。2 階張り出し部分は全面にガラス窓の設けられた明るい開放的空間であり、当時の人々に文明開化を実感させたことだろう。建物正面中央に張り出し、望楼等を設け意匠を凝らし強調するのは、明治初期の洋風建築の特徴の一つである。

現存する代表的な明治初期洋風建築の小学校は、松本市にある旧開智学校 (明治 9 年竣工) であるが、そこで見られるような奔放で破天荒な和洋折衷の造形はここでは見られない。竣工は少し後 (明治 15 年) ではあるが、既に洋風建築の基本を押さえた堅実な意匠であり、建物のプロポーションも良い。六角形の張り出しをつけることにより独自性と正面性が加えられ、小振りでも愛らしい魅力的な洋風建築となっている。

建物内部は用途変更による改修により当初の姿を留めていないが、解体された別の旧校舎の段板を再利用して造られたT字型階段は旧来の雰囲気を与えている。当初、1階は中央の玄関を挟んで西側に職員室、東側に応接室が配され、2階は裁縫室として使われたようで、教室は渡り廊下で繋がる別棟の平屋建て洋風建物内にあったようだ。



3度に亘る移転、改修により、当初材が失われている割合が高いが、棟木、小屋梁、基礎石、玄関の段石、礎版石、丸柱及び柱頭繰形、軒蛇腹、胴蛇腹、出隅飾り柱、窓枠等の一部は当初材と思われる。内部は大部分が改修されているが、外観は概ね当初の姿を今に伝えている。建設から約130年間、時代の要請を有縁の人々の思いを力に移転、用途変更という手段で柔軟に受け入れつつ再生され続け、現在当初の位置近くの理想的な環境のもと今津の地に誇らしく建っている。今津六角堂は明治前期の洋風学校建築として兵庫県下では最も古い

遺構であり、歴史文化的景観価値として高いものがある。



●参考資料

- 1・今津六角堂 展示資料
- 2・今津小学校六角堂移転改修他工事設計図書 平成8年度 共同設計株式会社
- 3・日本学校建築史 1973年 菅野誠
- 4・今津学校ノ図「兵庫県下有馬・武庫・菟原豪商名所独案内の魁」 神戸市立博物館蔵
- 5・西宮あれこれ
- 6・ふるさと春秋 1988
- 7・今津物語—今津小学校創立百周年記念— 今津小学校百周年記念事業委員会 昭和48年
- 8・職人たちの西洋建築 初田亨 講談社 1997年
- 9・兵庫県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書 兵庫県教育委員会 平成18年
- 10・明治の学舎 中村哲夫 小学館 1997年
- 11・棟梁たちの西洋館 増田彰久 中央公論新社 2004年

●藤井成計プロフィール

- ・一級建築士／兵庫県ヘリテージマネージャー
 - ・有限会社アトリエ・パル 代表取締役・管理建築士
 - ・西宮市在住
- 1948年／神戸市生れ
1972年／神戸大学工学部建築学科卒業
旭建築事務所／都市・計画・設計研究所勤務
1995年／アトリエ・パル開設

今津小学校 今津六角堂

文・写真 稲上文子



2013年5月にはまちかどコンサートが開かれたそうです。「歴史を感じる会場」とはまさしく言い得て妙ですね。「明治15年築の洋館建の校舎、3回の移築を乗り越えて、蔵風の新校舎と共に」

教育熱心な今津

宝暦5年(1755)、海岸近くに大観楼という学問所が建ち、京都から著名な学者を招くなどして学問に励み、今津は古くから教育熱心な土地柄といわれています。

明治5年日本にて最初に学校制度を定めた教育法令である学制が公布され、全国に小学校が開設されていく時代、今津小学校の設立は明治6年、今津村と津門村が連合し、今津村常源寺(現今津水波町)を仮校舎としたことが始まりだそうです。とても小規模な建物ですので、この他に講堂などの付属施設がほかにもあったのかもしれませんが(要調査)。

同時代、一足早く明治7年、西宮小学校(今の浜脇小学校)の新校舎(東町3丁目)が作られ

ました。「西洋作りの浜の学校」と言われたモダンな小学校だったそうで、今津の人々の新校舎をという思いを实らせ、明治15年1882出在家に洋風校舎(現在の六角堂)を新設しました。(※注意:旧西宮小学校については文献調査中)

この校舎の建築費は8,000円、そのうち5,200円は両村民有志による寄付だったそうです。学問にかける意欲の強さはこの地域の伝統でしたが、当時、米一石が8~9円の時代、しかも、地域産業の酒造業不振の折だったそうです。



正面玄関上の八角形の塔屋

移築の歴史

第2次世界大戦中の昭和20年8月5日の夜、

今津地域だけで約300人の死者を出した大規模な空襲がありましたが、今津小学校と六角堂は焼けずに残りました。(当時は六角堂とは呼んでいなかったと思われる。)そして、昭和20年8月16日に終戦を迎えました。

昭和25年に校内西南の隅へ、六角堂初めての引っ越しがあり、老朽化した六角堂の改築工事が終わった昭和30年12月27日に今津公民館として開館しました。当時市内で2番目にできた公民館でした。

昭和39年(1964)、名神高速道路インターチェンジの開発が始まりました。これに伴い、講堂用地確保のため、第二阪神国道(現在の国道43号線)の北側に新たに公民館の設置が決まりました。これにより、役目を終えた六角堂の取り壊しが検討され、昭和39年に、六角堂が取り壊されることがほぼ決定しました。



小学校北側から学校越しに見える大関の看板

六角堂保存運動

しかし、地域住民の強い要望が市議会を動かし、六角堂取り壊し案は取り下げられました。六角堂は小学校の北門西側に移築して、今度はインターチェンジを背に、昭和40年「今津幼稚園の園舎」として大改装(建物ごと曳

き家したのでなく解体し、1階の柱をとる、階段の計上を変えるなど幼稚園の用途に合うよう改変、ただ石、柱などの古材は流用された模様)に使われることになりました。この年に当時の県知事が正式に「六角堂」と命名したそうです。(昭和40年2月六角堂復元移築完了)

阪神大震災と新校舎

平成7年阪神大震災で、瓦が落ち、窓ガラスが割れたそうですが倒壊は免れました。震災後、校舎の改築・増築に伴って、南側の最初に建てられた場所に近い酒蔵通り沿いに移築されました。

平成9年4月 六角堂及び西校舎解体工事開始、平成10年10月竣工するとともに、六角堂は「第7回・兵庫県さわやか街づくり賞(建築物部門)」を受賞。

結果的に、太平洋戦争の戦禍や震災の被害を免れ、その間小学校の敷地内で二度移転された後、三度目、現在の「酒蔵通り」に面した位置に移設(解体、内装・間取り・階段を新たに再建、移設前の材料はできるだけ使用)され、現在の姿になりました。小学校校舎、今津公民館、今津幼稚園と用途を変えながら、現在は今津小学校の学舎の一分に戻り、1階は六角堂の歴史資料の展示コーナーと地域の人々へ開放した集会室(会議室)、2階は視聴覚室(大きな洋室と八角形の出っ張ったサンルーム)として使用されています。

文化財になれない無冠の六角堂

現在の六角堂が文化財指定されない理由は、当初建築材料の残存率が低く文化財としては改造が多く、いわばレプリカ=「外観復原建物」との認識が文化財関係者にあるからだそ

うです。しかし、部材は入れ替りつつ、老朽化や移築、用途の変更にめげず現在その姿をとどめていることには大きな賞賛があつていいものと思われまふ。

・・・公民館当時の写真を見ると、窓の棧の割り付けが違っていますが、元はどうだったのでしょうか。また鎧戸のついた絵図も残っているようで、再調査の意義が大いにあるようです。どうか、ご存知の方からの情報いただくとありがたいです。

同時代の建物



下見板張りの洋館の例：旧辻川郵便局 大正12年築の国の登録有形文化財（2008年）



生駒宝山寺獅子閣は擬洋風建築 明治15年築の国の重要文化財

明治15年にはお雇い建築家コンドルが東京皇室博物館(旧本館)を設計、開館し、翌16年には同設計の鹿鳴館が竣工している。お隣神戸の旧居留地十五番館(重文)も同時期(明治14頃)に建てられた西洋館。木骨煉瓦造で、南面両端にベジメントをつけ、二階の開放的なヴェランダは、のちに室内に取り込んでいる。また外壁は板張りで、ペンキ仕上げ、窓の鎧戸も六角堂の古絵図と類似点がある。

参考文献

明治時代の絵図武庫群役所とともに、鎧戸つきの外観図、古い平面図(今津六角堂所蔵)
『西宮あれこれ その自然と歴史を語る』
1979年 武藤誠/編



近代神戸の小学校建築史- 2019/3/20

川島 智生 (著)

序章 神戸の小学校が歩んだ近代

第一章 明治・大正前期の小学校建築

第一節 明治前期の小学校校舎の成立と建築特徴

第二章 大正・昭和戦前期の神戸市における小学校建築の成立と特徴

第一節 神戸市における鉄筋コンクリート造校舎の成立と特徴

第二節 代表的事例

第三節 実現された鉄筋コンクリート造校舎

の一覧と評価

第三章 大都市近郊町村における小学校建築
の成立 一兵庫県旧武庫郡町村

第一節 大都市近郊町村における小学校建築
の成立と民間建築家との関連 一兵庫県旧武
庫郡の町村を事例に

第二節 代表的事例

第四章 小学校をつくった建築技術者

第一節 神戸市営繕課の組織と活動

第二節 日本トラスコン社の活動

第三節 神戸を代表する建設業者

第五章 小学校をつくったフリー・アーキテ
クト像

第一節 建築家 清水栄二の経歴と建築活動
について

第二節 建築家 古塚正治の経歴と建築活動
についての研究

第六章 戦災・震災と小学校校舎

自らを YATOI と称する彼らが果たした役割
はいかなるものであったか。日本繁栄の礎を
築いた「お雇い外国人」の功績をさぐる。



お雇い外国人——明治日本の脇役たち（講談
社学術文庫）

梅溪 昇

明治時代、日本の招きにより、近代化の指導
者として大勢の欧米人が渡来した。その国籍
は英、米、独、仏等にわたり、活躍の場も政治、
法制、軍事、外交、経済、産業、教育、学術と
多岐にわたった。日本での呼称そのままに、